觀音經と何やらは早い程好いと一人の車夫が註釋した。

硝子戸の外に合羽の巡査はウロ〳〵してゐた。

寒中の雪を食べると一年中風引かないと一人の男が言つた。

くだらない話が初まつた。

茶店の亭主はコツソリ裏口へ廻つた。誰かゞ呼んだのだ。

風體の變な男が這入つて來た。新吉は不隱な空氣を感じてゐた。

停車場の待合所へ、紙函を提げて行つて、汽車賃表を見上げて、懷ろの細布に手を掛けゐると、其殺那だつた。

合羽とマントを着た二人の巡査が、兩脇から僕の腕を掴んで、後ろにネヂ上げて、素早く縛つて了つた。

『何をするのだ』

僕はそれから雪の中を一里半ばかり歩るかせられて、はだしになつて前の警察まで拘引されたのだ。